



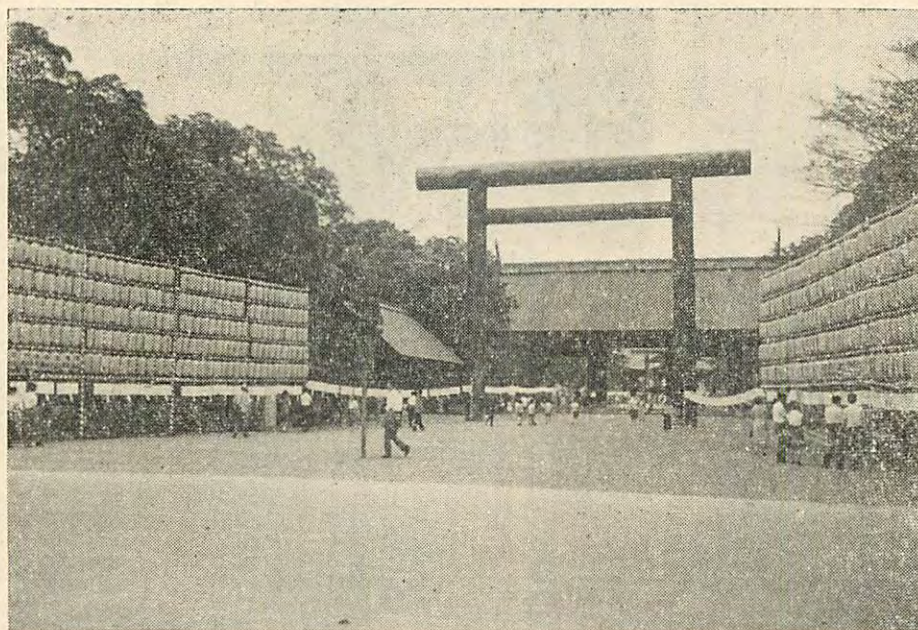
クェゼリン方面  
戦歿者遺族会  
中央区日本橋蛸殻町2-11  
泉商事株式会社内  
電話 東京(661)6511  
振替口座東京93487番  
編集兼発行人 浮田信家

「環礁」を通して皆様へ

加藤 普佐次郎

私共は「環礁」によって心の底にひびく共通のものを感  
じつつ縁の糸に結ばれている者です。今迄お互に相識る由なく  
二十余年に亘って愛する者の最後も知り得なかつたのですが  
この遺族会が結成せられて当路の方々の御尽力により二十周  
年記念式典も挙げられ現地の事情、戦況等も知る事が出来ま  
した。蘇生して米軍に連れ去られ再び鹿児島に帰った一人の  
外は全部戦歿、その数は一万二千余人とのことです。各員に  
親二人、妻一人、子二人宛と仮定すれば遺族は六万人に上り  
ます。その六万人がわが子、わが夫の行衛を求めて居たので  
す。夫の帰りを港に立って十八年間待ち続けた人もありま  
す。環礁は実に今となって六万人の人の献げる燈明です。六万  
人の皆様！ その血涙を以ってこの誌上に事実を書いで下さ  
い。そして互に慰め合いましょ。私の長男一富士は軍医大  
尉としてクェゼリンに宇治丸と運命を共にした者でありま  
す。最後の手紙はその一週間前に他の島から発信せられて居  
ります。それ以来私は彼の戦死の場所を、又、同船の勇士の  
名を求めて居る者です。環礁の誌上を通して運命を共にした  
同胞の尊名をも識り、遺族の実生活の上にも愈々親密が加わ  
り、お互に力を合せる機会も与えられたと思います。私共  
は愛する者の戦歿を記念する許りでなく、英霊を安めまつる  
為にもかかる運命に陥る人が無いよう、真の平和を念願しつ  
つ、環礁を中心として力を尽していきたいと思ひます。

(本会副会長・医学博士・明治大学法学部講師)



靖国神社みたままつり

(四頁五欄参照)

目次

「環礁」を通して皆様へ  
……副会長 加藤普佐次郎(1)  
今年の二月六日  
……常任幹事(2)  
遺骨収集帰還、現地慰霊、建碑  
計画その後……浮田常任幹事(2)  
第一期決算報告……佐藤常任幹事(2)  
あの頃のことども……(3)  
ウイリアムス氏から浮田幹事あ  
て書簡……(3)  
遺作と会員だより……(4)  
柴田外美子様……(4)  
小野寺定右衛門様……(4)  
辻野美智子様……(4)  
棚橋ちよ様……(4)  
井原森太郎様……(4)  
沖野金蔵様……(4)  
お知らせ「みたままつり」……(4)  
遺作「随分大きな島」(1)……(5)  
寄附者芳名……(6)  
事務局たより……(7)  
本会役員及び篤志会員名簿……(8)  
誌名「環礁」の説明は第一号  
に記載しましたが、題字は本  
会々長林茂清様に執筆してい  
ただいたものであります



今年の二月六日

常任幹事

一昨昭和三十八年までの二月六日は靖国神社への参拝は三々五々思い思いであったため、やっと十数名が英霊をお慰めする程度であった。それが本会の発足によって本年は一昨年の十倍余の百六十名、しかも北海道から鹿児島に至る三十二都道府県から御参拝の方が見えたということは英霊のため心から喜ばしいことと思う。

今年六、七十名も見えるかと予想し、環礁一号の事務局だよりに十数行の御案内を掲載したに過ぎなかつたが、実際は御申込み多く、直前に行事や場所の一部を変更するという場面も起るほどであった。予定の午後一時拝殿において修祓の後、全員本殿に昇り、御饗、御酒を捧げ、斎主による懇ろな祝詞が奏上された。今にも雪の降りそうな冬空で、寒さもかなり厳しかったが一同心ゆくばかり英霊との社頭対面ができ冥福を祈った。

終つて御神酒をいただき、それぞれ「昇殿祈請の神霊」を下附されて神社を退下した。そのあと靖国会館二階の講堂で映画「靖国の四季」と昨夏金沢市における石川県クエゼリン島戦歿者遺族会の状況を十六ミリで紹介された。つづいて古賀副会長が議長席につき定期総会が開かれた。林会長、朝香孚彦相談役の御挨拶が行われ、一同同じ気持ちで英

霊に対し敬虔な慰霊をつづけることをお互い誓った。議題は会名変更とこれに伴う会則の変更、会計報告、連絡事項として現地慰霊、収骨建碑計画の事情等の説明が行われ、午後四時解散した。小雪のまざつたみぞれが寒そうに舗装の路面をぬらす中を、来年もまた来ますよと、英霊を慰め得たすがすがしさを胸に、それぞれ帰路についた。

遺骨収集帰還、現地慰霊、建碑計画のその後

浮田常任幹事

39・11・13 厚生省援護局長から外務省アメリカ局長あての書面をもつて、米大使館に申入方を要請した。

39・12・2 石橋湛山顧問が国会に神田厚生大臣を訪ね本会の計画が実現するよう依頼した(これまでものこは前号掲載とおり)これが相俟つて、外務省から在日米国外務館あて誠意のこもつた要請がなされた。

40・3・18 二回に亘りアメリカ局長から援護局長あて回答あり、クエゼリン環礁が制限地域に属するため難色がある。ただし厚生、外務両省の支持が強いので頭から駄目とはいふてこない。「拒否することにならざるを得ないだろう」という婉曲な文面の回答である。

40・4・19 本部役員協議の結果明確な拒否ではないのだから、更に石橋顧問の御尽力を願つて

関係当局への要請をつづけることとし、  
40・4・29 石橋顧問に右経過を御説明し、万一早急の実現が困難でも時局の落付を待つて必ず派遣できることになるよう厚生大臣に申し入れることの御快諾をいただく。  
40・5・27 土屋太郎殿(本会篤志会員)から米人ウィリアムス氏(環礁一号10頁5欄。左から



4行目参照)からの書簡回送をうける。これによると遺族の代表が、戦死場所を帯へないという理由はない。更に関係筋に要求すべきであろうとの示唆あり。

40・6・6 本会からウィリアムス氏(カリフォルニア州オックスナード市)あて好意を謝し更に具体的の指示をもとめる。  
40・6・11 折り返し回答をうける。クエゼリンの米指揮官あて直接要請することが効果的であると、自分からも書面で紹介

し依頼したので会からもすぐ要請ありたき旨指示あり。宛先も判明したので6月14日二十年祭のスナップ写真も添え要請状を発送する。従つて現在は石橋顧問からの政府機関による要請と、会から直接現地機関との交渉の二途の回答待ちというわけである。

御参考までに三月十日NHKの放送や新聞によつて南方に慰霊団を派遣するというのが発表された。仏教文化協会の企画で昨年十月頃から本会も相談をうけ資料を提供し援助もしたが、多少無理と判断し、本会から会員への御通知は控えた。この計画は員数百十六名、申込三月二十日迄、費用一人十二万円、年令七十才以下ということであった。資料提供、指導もしたので、クエゼリン会は三十名とすることで決めたが、やはり米国内から正式に拒否された。本会々員に申込まれた方が十名あったが、中止の旨協会からの通知を受けた。

写真説明・白い柵の内がクエゼリン島の墓地で、米軍の手によるものらしく、入口の鳥居は赤く塗られ、たどたどしい日本語で日本人墓地と横書されている。人物はウィリアムス氏の友人サウアンバーク氏。捧持する箱に砂が納められている。この砂今はロサンゼルスにあるが、この秋帰国予定の海上自衛隊の艦で、ルオットの砂とともに日本にお迎えてできるよう交渉中である。

第1期

決算報告書

(自三十八年六月二十九日 至三十九年十二月三十一日)

一、収入	九〇〇、一一二
会費・寄附金等	九〇〇、一一二
預金利息	二五、三六九
収入計	九二五、四八一
二、支出	
印刷費	一〇一、五一〇
刊行費	一六八、五三〇
二十年祭諸費	七一五、六六〇
通信費	一二七、八六四
事務用品費	二二、三六〇
事務費	一九、三六〇
会議費	一一九、五五八
荷造運賃費	八、二三〇
交通費	三、三〇〇
振替振込料	三〇、三四〇
雑費	三〇、三三五
支出計	一、三六四、六一二
三、現金・預金(期末有高)	
現替貯金	三、四〇七
普通預金	三、六七二
当座預金	八、四三七
定期預金	四八七、六八二
現金・預金計	五〇七、八六九

右のとおり報告いたします。  
昭和四十年二月六日  
クエゼリン島戦歿者遺族会

会長 林 茂清  
常任幹事 浮田 信家  
常任幹事 佐藤 宗丕  
監事 岡野 正文  
監事 橋口 昭利  
昭和四十年二月六日



# あの頃のことも

名古屋の樺山幸子様からあの頃の新聞切抜をお送り下さいまし

「死の特火点」で応戦  
敵・空前の連続砲撃

「ストックホルム」特電二十八日  
二月十四日附米誌タイムは、マーシャル諸島の攻防戦に關し左のごとき記事を掲載している。

米軍が中部太平洋侵攻を企図して、マーシャル諸島攻撃作戦を決めたのは昨年夏のことだが、十一月のギルバート諸島攻撃で甚大な損害を蒙つたため、米海軍作戦部の幕僚連は酷く煩悶した。米海軍はその苦い経験に懲りて最初作戦計画を変更したらしく、米軍は損害を無視してマーシャル諸島の鍵点に當るクエゼリン環礁に侵入した。すなはち、真珠湾から最も近いウォッゼ島やマロエラツ島は強力な日本軍基地だから最初の上陸目標とせず、マーシャルの外郭島嶼を衝かないで背面深く侵入し、マーシャル諸島最大の環礁「クエゼリン」島に対し、上陸作戦を行ったのだ。

タラワ島では三千トンの砲爆弾を叩きつけたが、椰子の丸太と鋼鉄とコンクリートで固めた要塞攻撃には十分役に立たず、四時間ぶつとおしの艦砲射撃でも駄目だった。だからクエゼリンに対しては侵攻開始の二カ月前から爆撃を開

始し十七回におよぶ陸海軍の空爆で環礁を痛めつけた。さらに侵攻の三日前から艦砲射撃を始めた。休みなく艦艦および巡洋艦の群れが六インチ乃至十六インチの砲弾を一千発も叩き込んだ、ルオット島およびニウル島だけでも五千トンの砲爆弾が溶びせかけられた。艦砲射撃が一息つくと陸上基地から飛出した陸軍機と空母からの海軍機があらわれて、数百個の爆弾を雨のように投下した。その中には二千ポンドの爆弾も沢山あった。半トン位の爆弾では日本軍の防禦陣地はびくともしないといふことがタラワの実戦で判つていたからである。海兵隊の上陸準備が整うまでにクエゼリンの環礁の三小島嶼は約一万五千トンの爆弾および砲弾を受けた。これだけの砲爆弾を一個所に受けたことは全く戦史に前例のないことだ。

こうしておいて、いよいよ陸上部隊の出動となった。中央太平洋水陸兩用部隊はクエゼリン島に対しては従軍の古強兵(兵)を、またルオット島およびニムル島に対しては新編第四海兵師団を派遣した。タラワ島では正面攻撃をやつて甚大の損害を受けたので、今度は陸軍部隊は先づクエゼリン島の側面を衝いた。ルオット、ニムル両島は殆ど艦上の巨砲によつてとりまかれた。一日砲撃が行なわれた後

で主目標たるこれらの島への攻撃が行われた。部隊が海岸についた時、爆弾により廃墟となつた個所や椰子の蔭から機関銃と小銃の射撃を受け、敷地内においては頑強に抵抗に遭つた。然し大部分の場所は破壊された海岸砲や粉砕されたトーチカや日本兵の死体ばかりが残つてゐた。生き残つたトーチカはつきつぎに火焰放射器、多量の爆破薬、ロケット砲の洗礼を浴びた。

## ウイリアムス氏から

### 浮田幹事あての書簡

ウイリアムス氏



「戦争慣れのした図太い海兵ですら今や米空軍の爆撃で狂気に瀕したこの日本兵を殲滅する仕事だけに辟易した」と報じている。クエゼリン島の日本軍の特火点の頑強な抵抗に米陸軍部隊の同島攻撃がはかばかしく行かなかつたので、米陸軍は再び艦艦や爆撃機を呼び戻して野砲やバズーカ砲に助けを貰つた。かくてクエゼリン島におけるトーチカからトーチカへの戦闘は実に四日の激戦の後遂に終熄した。

惨なことであろう。私は今夕食を終つたのだ。しかし傍の日本軍人は既に戦死している。日本とアメリカとは、戦争をしなければならなかつたのでしようが、今ここに眠っている日本兵は場合が違えば、私の良い友達であつたに違ひありません。この近くで日本軍が防禦のため構築した大きな塹壕があります。この中に多数の日本海軍々人が眠っている。この中には米軍の手によつて戦死するよりも捕虜として捕われるよりも、むしろ自分の小銃によつて自害することをいさぎよしとして亡くなつた人もあるでしょう。戦死者は一人一人検屍をしたのではなく、全員を集めて一緒に埋葬したので遺体の区別はできていません。戦歿日本兵の遺体は既に島の土と化したのでないでしょうか。丁度珊瑚のそれのように。ですから墓の砂を収集されれば、それが日本軍人の遺骨と考えられると思います。私は最後に、是非ともあなたに書いていただきたいことがあります。それはマーシャル群島に行動した私共米全將兵は、日本軍の勇猛果敢な、そして優れた技術について、驚嘆と敬意を表していたという事です。

私は艦で昭和十九年一月三十一日ルオット沖に着きました。ルオット島、ニムル島の二島には三昼夜に亘り、はげしいしかも休みな海からの砲撃と空からの爆撃が加えられました。翌一日米第四海兵隊師団が両島に上陸を開始しました。はげしい三日間の砲撃にひどく痛めつけられたあとなのに、日本軍は助かるあては全くな

三、四日後には全遺体は島の西方に集められ大きな塹壕に葬られました。その塹壕は今なお私の記憶に残っています。場所の表示はされてありませんが、私はまだ良く覚えております。当日夕方糧食とよんでいた弁当で夕食をとるため、戦死した日本海軍々人の側に腰を下しました。私は何回か緑りかえし思いました。何という悲

ケイス・エス・ウイリアムス  
昭和十九年一月海軍兵曹長・  
太平洋艦隊航空艦隊乗組搭乗  
電信・機銃担当員



# 遺作と会員だより

柴田外美子様より (40・1・21受)  
何処へ征つたものか行先も知らぬまま戦死の公報を受けました。遺言状にある我が志の成らざるは寂寥たる心境は五ヶ山に対する論文を満州まで送らせまゝとめていたのが転属の折未完のまま送り戻して来たものでは判ります。スケールの大きな子でしたのに、私事でなく残念です。大成させてやりたかつた惜しまれてなりませぬ

隊し、六ヶ月修業のときは海軍大臣賞や銀時計をいただき、十九年は戦友の仇討にマキン、タラワに征きます。お父さんお母さん元気で僕の戦斗ぶりを見守って下さい。

靖国の華と散る身はいとわねど心にかかる 国の行末の便りが最後となりました。隊名は只イ部隊とのみ。その後便りなく案じておりましたところ十九年八月戦死の公報をうけました。地図を見ても判らず半信半疑でありましたが今回のお便りではっきりいたしましたことをありがたく存じます。

〔戦歿者・宮城県海軍上等飛行兵曹小野寺政春殿の父〕  
小野美智子様より (40・1・28受)  
私も遺族の一人でございますが現在千葉大病院でナスとして元気に働いております。昨春無事学校を卒業し、早くも一年になろうとしております。ナスという職業柄土曜日といえ、当直がありまして二月六日は出席できそうにございませぬが、たまに東京に行きました折はよく靖国神社に参り一人霊前に佇みます。二十二年前私の生れた日が父の兵隊検査合格の日でした。ふりかえって見ますと私の短い二十二年の間にもいろいろのことがございましたが私なりに一生懸命やりぬいて来たつもりでおります。少なくとも父親が

いないからと云はれないよう、又立派であった父の考えや態度に報いるためにも、「父は最も苦しいことに耐えぬいたのだ」と思うといつも力づくよく励まされました。これから先も父はあらゆるときに私を助けてくれると信じています。

〔戦歿者・栃木県陸軍工兵隊長・辻野英男殿の長女〕  
棚橋ちよ様より (40・5・5受)  
先日来お世話下さいました仲次郎南方における貯金払戻しの件二十七日(四月)当地石動郵便局より御案内がございまして全額で四百七十七円也を受取りました。戦地において蓄えたこの尊いお金子想もしていなかったもの、早速息子の仏前に祈に致して當時を偲び一しは感激をお新に致しました。本当に少額ではございますが、私はこのお金は寄附したいと思っておりますので、クエゼリン方面戦歿者遺族会で何かの御役に立つよう使っていただきたいと思っております。それが戦死した息子への何よりの供養と私は信じております。何卒私の気持をお汲みとり下さいませ、お手数乍らよろしく御取計いのほど御願いたします。

〔戦歿者・愛媛県海軍二等兵曹・井原高繁殿の両親〕  
沖野金蔵様より (40・1・30受)  
私は遺族ではなく、クエゼリン島最後の引揚者です。マキン島クエゼリン島、サイパン島と三回の玉砕を紙一重の差でからくもまぬがれ、トラック島で終戦を迎えた者であります。クエゼリンを出港したのは一月二十九日であったと思えます。当時の上官・戦友は殆んど戦死されました。生還した今日南海に散った英霊や御遺族の皆様には申しわけなく、御住所でも判るならばお線香の一本も霊前にお供へしたいと思っております。ところ、思いがけず「環礁」一号をお送り下さいました。私は驚きと嬉しさに飛びつくように頁をめくると、あるある、何と懐かしい名が並んでいるのでしよう。保坂、諸君、大槻、高木等々泪で活字がすすんできました。保坂はいつも故郷に残して来た母親の事を話して居ました。大槻は玉砕以前に敵の奇襲作戦にひっかかりあえない最後、高木隊長は私達の最も尊敬していた人で口鬚の立派な武人。「武士道とは死ぬことと見つけた

り」と口癖のように云っておいででした。色々のことが懐しく頭に浮んで来ます。胸一ぱいになります。心から上官・戦友の御冥福を祈っております。

〔現住所・東京都荒川区東尾久三丁目二の四号〕

○お知らせ  
「みたままつり」について  
靖国神社の「みたままつり」は春秋の例大祭の外に、昭和二十二年から恒例の祭りとして御遺族崇敬者の御協賛によって行われて参りました。今日では東京の夏の風物として多くの人々に親しまれる祭となりました。靖国神社の御祭神は私達の身近に生活されていた方々で、しかも国家の非常時に当り身命を捧げてその難に殉ぜられた人々であります。この人々の功績を顕彰することは勿論、この人々のみたまを慰めることを忘れてはならないと思えます。七月は丁度盂蘭盆の時期に当り、各家庭に於ては古くから祖先や肉親のみたまを慰める祭が行われていますが、靖国神社もこの時期に当ってみたま祭を行い、御祭神をお慰めすることと存じます。気深いことと存じます。

みたま祭は七月十三日から十六日まで催され、戦歿英霊二百四十余万柱のみたまをお慰めするため各界著名の方々の揮毫になる懸はんぼり並びに遺族、崇敬者或は戦友の方々から奉納の

## 礎

南に 国展かんと 海原や 朝の風に 艦出ずるかも 艦橋の 飛沫に濡れて 南の 十字の星を手に取らんとす 我身これ砕け散るとも天照らす 現つ御神の御後威展ぶべし もとより生還を期するなし 我が志の成らざるを惜しめば寂 寞たり

〔戦歿者・富山県陸軍主計曹長・柴田桂太郎殿の姉〕  
小野寺定右衛門様より (40・2・11受)  
次男小野寺政春(22才)の散華したルオット島の戦況お知らせ下さいました。伴は昭和十七年六月中攻撃隊員として朝融王殿下に従ひ比島に征き、ポートモレスビー・メラウケ等各所を爆撃し、印度洋ではイギリス巡洋艦を轟沈し各所に戦果をおさめ、十八年六月横浜航空隊特科練習生に選抜され帰

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕  
棚橋 ちよ殿  
上記の金額をお近くの郵便局でお受取り下さい。  
昭和四十年四月二十四日 熊本地方貯金局

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

## 環

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

## 環

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

## 環

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕

〔戦歿者・富山県海軍軍属 棚橋千次郎殿の母〕



遺作

随分大きな島 (1)

兵曹長衛藤二六殿日記

九月二日 (昭和十六年)

昼過ぎ南洋方面へ転勤の命を受けた。

九月三日

兄に転勤を知らせたには佐世保に来て呉れるよう電報を打つ。

もうすぐ佐世保とも、お別れなので、少し位下宿へゆつくりして、いよいよ思うんだが、何となく気急しくてそれも出来ない。日用品や薬品をもとめ下宿に帰りつが、まだ行先ははっきり判らないが、いづれにしても、不便な土地であることは確からしい。

九月四日

退隊の準備が完了した。小雨。午後妹から夕方、佐世保到着の旨電報を受けた。午後四時隊員の方々に在隊中のお札をのべ、五時五十七分着の列車に会うよう韋駄天走り、駅に向う。高橋君も、雨に流された石ころだらけの道を、裸足で同行してくれた。大急ぎでやと時間までに辿りついた。駅には八重子さんとチヅ子さんが迎えに行ってくれた。妹に会ってみると女学生時代とちつとも変つたのでない。高橋兵曹のお招きがあったので、妹をつれて、お決れの宴にのぞむ。楽しむ時をすぎし十一時すぎ旅館につく。

九月五日

午前中退隊できると思っていたが、まだ発令がないとかで出発は

明日になった。午前も午後も何もすることがなく退屈で仕方ない。夕方五時五十分外出が許可されたので大急ぎで下宿に向う。妹が首をながくして待っていてくれた。夕食後妹は八重子さんとちと映画に行った。小生は今村さんの家に暇乞にゆく。映画の終る頃、第三中央映画館まで妹を迎えにゆく。帰途喫茶店で憩む。もう再びこうした事は訪れて来ないだろう。何となく静かな気持ち胸にせまってくる。家に着いたのは十一時近くだった。十二時佐世保で最後の床につく。何も気になることはないし、ゆつたりした気持ちで眠られた。

九月六日

静かに出発のときを待つ。午前送還する不要品の荷物を駅に運ぶ。すっかり準備をすまし、午後分隊長、分隊長へ御挨拶に行ったところ急に予定変更で出発見合せとなった。切角張り切っていたのが、すっかりさせられた。

九月七日

昨夜は随分早く寝たのに、目をさましたのは六時過ぎ。昨日は相当疲れたらしい。九時トラックで山に登る。佐世保海軍通信隊・方上分遣隊。随分久しぶりの山が気がした。秋になると山の魅力が急に増す。午後鳥帽子岳の附近は山を慕う人々の群で一杯だった。

九月八日

高橋兵曹が柔道の訓練中骨を折ったとか。全く心外の出来ごとだ。飛石兵曹に招待されて訪問する。とてもきれいな家だ。それに羨しいほどお二人の仲が良い。つい優しい奥さんにすめられすっかりいい気嫌になり話に花を咲かす。飛石兵曹の戦争論も、しばらくは聞かれないだろう。八時頃暇乞いし、飛石兵曹と二時間散歩し十一時とても良い気持ちで床にもぐる。

九月九日

管制線の工事とかで人夫多勢着。彼等は朝六時頃家を出て来る。女の人もみたが大抵の事じゃないだろう。午後母と妹にたよりを出す。日本刀をお願いしておいたが間に合うだろうか。夜間は教練でちょっと忙しかった。

九月十日

午前中小雨。午後から晴れ気味夕方にはすっかり晴れて夜空に綺麗な星が無数輝いていた。下の人々は物凄くいほど暑作りが好きと見えるところ点々とした星が見受けられる。その一つ一つに松井農園とか奥山農事試験場とか書いた立札がしてあるのも面白い光景である。

九月十六日

九時過ぎ受信所並びに測定所の人々にお決れをづけ懐かしい山路を下る。過去六ヶ月余雨の日も風の日も通いつめた道であった。路傍に咲き乱れた野花を摘みとったことも、村の人々に花を出合つて感じのいい挨拶を受けたことも、総て懐かしい想い出としてのこのころのかと思ふといささか去りたい気持ちになつてくる。途中下宿で小母さんの心尽して昼食やお別れの酒をい

たゞいで本隊へ下りていった。明日出港の夕風便乗と定められた。午前は入院中の高橋兵曹を見舞いかたがた御決れにゆく。思いの外元気な様子に安心できた。午後三時分隊長、分隊長、司令の方々に御礼かつ御決れをのべていよいよ洋上生活への第一歩をふみ出すべく「夕風」に乗り込んだ。小生と同方面に向う人も五、六人いて何となく心強かった。午後五時すぎ思いがけず上陸が許されたので急ぎ下宿に向った。星、妹から「ブジナセイトワイノル」なる電報を受ける。関根氏が不在の外他の人々はみなおられ愉快な時をすごした。午後十一時すぎ皆さんとお別れして愈々佐世保で最後の床に就いた。

九月十七日

早朝瀬尾さん、今村さん、豊子さんのお見送りを受けて棧橋へ向う。幾月か幾年、或は又永久にかお会いできなくなる人々だと思ふといささか惜別の情が胸にこみあげてはくるが目下国家のためにつくしてはいる戦友と運命を共にするのだと思ふとさっぱりした気分でお決れが出来た。

九月十八日

午前十一時出港。刻一刻薄ほんやりと遠ざかってゆく島々をいつまでも甲板からうらなながめた。母の住みます国、なつかしい家族優しい妹、親切な人々の残る国。心からそれ等の人々の上に幸多からんことを祈った。

九月十八日

終日南へ南へと艦は進む。真夜中頃から物凄く暴風雨になつた

大小数千個の献灯を参道にかかける等夏の宵にふさわしい行事が行われ御祭神の御感応は勿論五十万人に及ぶ参拜者にも親しまれております。クエリン会も昨年から会名を墨書した大型献灯を奉納し十三日から十六日まで表紙の写真の通りみあかしを捧げております。

九月二十一日

サイパンに近づいたらしく急に太陽の熱が増す。熱くて甲板には出られない程だ。九月二十二日 正午サイパン入港自分等の想像していたような島とは全く別で、まるで別天地のような美しい島であった。いたるところ鮮やかな緑に覆はれ、浜辺の近くは見るからに涼しげな椰子の並木が青空を仰いでいる。そこに建てられた家々はいづれもモダン。佐世保などよりは、ずつときれいで住みよさそう。ここであらう人が羨しくさえ思われた。夕刻艦は再び荒浪を蹴つて南に向った。

九月二十三日

秋季皇霊祭。洋上で遙拜式を行

九月二十三日

第六通信隊勤務、大分県庄内町出身、この日記記載当時二十四才。

(つづく)



# 寄附者芳名

(二九二名)

その後、続いて左のとおり多数の会員から運営資金としての寄附・  
 抛金がありました。会員の抛金のみにより、心からのお慰めをする  
 という当初からの方針を貫けるのも、ひとえに皆様の御協力によるもの  
 と御同慶のいたりに存じます。創刊号芳名欄には誤字、脱字があつて  
 誠に申訳ありませんでした。気のついたところは本号で訂正させて  
 いただきます。編集の不慣れによって手違いのありますことを深く  
 お詫びします。

今回、特異の御寄附は御遺族の御発意による英霊御生前の軍事郵便  
 払戻の御寄附三件と匿名氏の寄附一件であります。頂戴してよいかど  
 うか役員協議しましたが、それぞれたつての御申入れなので、有難く  
 頂戴することになりましたことを附記します。

## 寄附額 芳名(敬称略)

### ◆北海道

一〇〇〇 父 石川金五郎  
 二〇〇〇 弟 高橋 鎮夫  
 一〇〇〇 母 亀谷 勝江  
 〃 父 中島次郎左衛門  
 三〇〇 妹 小山キミ子

訂正・前号寄附者芳名中鈴木千  
 代は鈴木キヨの誤

### ◆青森県

一〇〇〇 妻 工藤 ハナ  
 〃 長男 佐々木健一  
 五〇〇 妻 大場 こと  
 〃 母 田中 ロク  
 〃 妻 新堀 ミエ

### ◆岩手県

一〇〇〇 母 刈屋みさを  
 〃 父 千田徳兵衛  
 〃 父 佐々木十一  
 五〇〇 妹 小杉 サヨ

### ◆秋田県

一〇〇〇 父 金 倉蔵  
 〃 母 高橋 ヨシ

### ◆山形県

五〇〇 母 千田 ウタ  
 二〇〇〇 母 青野はつよ  
 一〇〇〇 妻 石井 まつ  
 〃 妻 大場美津子  
 〃 父 武田 喜市  
 〃 父 星川 繁蔵

### ◆福島県

一〇〇〇 妻 大谷 リヨ  
 〃 父 鎌田 直志  
 五〇〇 父 半谷 久  
 〃 父 吉田 肇  
 訂正・前号寄附者芳名中左記記  
 入洩れがありました。謹ん  
 でお詫び申し上げます。

### ◆宮城県

五〇〇 兄 藤井重一郎  
 三〇〇 母 浅野とめの  
 〃 母 吉田みやの  
 訂正・前号十三頁上から二段目  
 三行宮城県は茨城県に訂正

### ◆茨城県

### ◆栃木県

五〇〇 母 池田 みい  
 二〇〇〇 兄 中村 源次  
 一〇〇〇 母 海老原あき  
 〃 母 宮内 はつ  
 五〇〇 父 坂巻源一郎

### ◆群馬県

一〇〇〇 父 笠田善四郎  
 〃 妻 城田起世子  
 〃 兄 竹内 清吉  
 〃 父 中西 源吉  
 訂正・前号寄附者芳名中群馬県  
 は記載洩れでありました。  
 ここに深くお詫びし、追記  
 いたします。

### ◆千葉県

五〇〇 妻 三橋 たか

### ◆埼玉県

二〇〇〇 妻 志村 マツ  
 一〇〇〇 母 小暮 コマ  
 〃 妻 長谷部なを  
 五〇〇 兄 田部井文雄  
 〃 妻 藤田きよせ

### ◆東京都

#### ◆東京部

一三四八(戦歿者)石橋 和彦  
 一三〇〇 父 石橋 湛山  
 一〇〇〇 父 匿名氏  
 五〇〇 父 黒川清一郎  
 〃 兄 加藤 富義  
 〃 弟 橋口 昭利  
 二〇〇〇 兄 荒井 福栄  
 二〇〇〇 兄 浮田 信家  
 〃 弟 木村 ちよ  
 〃 弟 佐藤 宗丕  
 〃 妻 原田 久  
 〃 妻 藤崎奈美子  
 〃 妹 宇田川ヒサ  
 〃 妹 内田 淑子  
 〃 妻 国松ふみ江  
 〃 妻 小泉 文江  
 〃 妻 佐藤 裕子  
 〃 妻 柴田 貞子  
 〃 妻 鈴木つな子  
 〃 妻 菅原 妙照  
 〃 妻 井上 賀雄  
 〃 父 有賀 武助  
 〃 母 荒木 しげ  
 〃 母 石橋ウメ子  
 〃 父 江間 敏寿  
 〃 兄 黒田 義雄  
 〃 母 小泉 タケ  
 〃 母 渡辺 勝  
 訂正・前号寄附者芳名中左記記  
 入洩れがありました。深く  
 お詫びし追記いたします。

### ◆神奈川県

一〇〇〇 弟 高木 勇  
 五〇〇〇 母 伊藤 義  
 二〇〇〇 母 岡野 うの  
 〃 妻 伊藤 シゲ  
 〃 母 小木ヒサノ  
 一〇〇〇 妻 落合てふ  
 一〇〇〇 父 小野寺鶴治郎  
 〃 妻 木俣ミサヲ  
 〃 父 西野 定利  
 〃 父 原田仁右衛門  
 〃 母 渡辺 イチ  
 〃 長男 田中 恵

### ◆新潟県

五〇〇 兄 今井 盛一  
 三〇〇〇 妻 藤田 より  
 二〇〇〇 妹 阿部りい子  
 一〇〇〇 弟 飯田豊治郎  
 〃 父 深谷 慎治  
 〃 父 丸山 四平  
 〃 妻 三浦 ヨリ  
 〃 母 山田 フミ  
 訂正・前号寄附者芳名第五欄新  
 潟県の七行目推名は推谷の  
 誤につき訂正いたします。

### ◆富山県

四七七(戦歿者)棚橋千次郎  
 二〇〇〇 母 棚橋 ちよ  
 〃 母 平井 為  
 〃 母 松田ふじえ  
 一五〇〇 姉 柴田外美子  
 〃 父 堤 与八郎  
 〃 妻 中村 ひさ  
 〃 妻 本多喜久江  
 七〇〇 兄 滑川 秀一  
 五〇〇 父 平井重太郎  
 〃 母 山本 チイ

### ◆石川県

〃 〃







### 事務局だより

と考えられるに至ったので、本年の定期総会に諮った結果、新会名をクエゼリン方面戦歿者遺族会と改められました。

#### ○会則の一部変更について

別項のとおり定期総会で会名が改められたのに関連し、会則の一部が左のとおり変更されました。(条文右側に○印を附したのが改正又は追加の字句です) 第一条(名称)この会は、クエゼリン方面戦歿者遺族会といいま

#### 第三条(構成)この会は太平洋戦争中南洋群島クエゼリン島(エニブージ島、エビゼ島を含む)ルオット島(ニムル島を含む)、ブラウン島(以下単にクエゼリン島、ルオット島、ブラウン島という)で戦歿した者の遺族を会員として構成します。

第四条(目的)この会はクエゼリン島、ルオット島、ブラウン島を戦歿者の英霊をお慰めすることを目的とします。

第五条(活動)中三、クエゼリン島、ルオット島、ブラウン島に残された遺骨を収集し、同島に忠魂慰霊碑を建立します。

#### ○英霊からの御寄附

寄附者芳名により御了解いただけるのとおり、今回は石橋和彦(東京) 棚橋千次郎(富山) 井原高繁(愛媛) 三英霊が戦地での尊い預金の全部の御寄附がありました。本会では会員の拠金だけで運営して

お断り。本号は八頁にしましたが、登載記事多く、遺稿や会員だよりの紙面がとれず、一部の方々だけしかのせられませんでした。次号は十六頁とし、皆様方の御寄稿をのせる予定にいたしておりますので御貴稿、御心境等お寄せ下さいませようお待ちしております。

#### ○会名変更について

しばしば御連絡しましたようにルオット島、ブラウン島御遺族の参加に伴い従来の会名では不適当

効に使用するように留意しておりますが、更に今回は匿名氏の御寄附を加えたい御寄附をいただき一層その感を深くいたします。決算報告に申したように、期末五十六万余の有意ですが、毎年約一億の現地慰霊費、忠魂碑の製作運搬等考えますと必ずしも、前途安心を許されません。

#### 死歿者叙位叙勲調査票調製作業について

#### 太平洋戦争中死歿した軍人軍属の叙位、叙勲が先年来発表されています。この対象となる者は陸、海軍合せて約百万人に及びます。この作業は第一段は終戦直後作製された上奏原簿(一冊数百人から数千人に及ぶ連名簿)から一人一票つづつのカードに戦死者の氏名、生年月日、本籍地、原簿の番号、頁数、死歿理由、死歿年月日、戦死前の位、勲、陸海軍別、等級など写すのです。本会が厚生省援護局から依頼されたので御紹介した次第です。早速三千数百名の希望者あり大略二十五万程度を書き上げ、七月二十日に完納の予定で作業をすすめています。作業中十九年二月六日日本の縁故者の分を何人か写し張り合いを感ぜました。これが厚生省で点検され、部に資料を追加記入され、本籍の都道府県に分かたれ、そこで遺族の現住所、存否等の調査記入が行われ、内閣費助部で審査の上決定されると聞いています。

#### — 太平洋奇跡の作戦 — キ ス カ

六月十九日から日比谷映画劇場でロードショーとして封切されるこの映画の試写会に招待をうけ鑑賞する機会を興えられた。最近制定された日本映画特別上映制度に登場を指定されるほどの大作と聞かされ期待して最初から鑑賞した。

戦後多くの戦争映画が上映された。その中の二、三は私も見たがどうもわざとらしく、苛酷でありつい見る気がしなかった。今回の作品は些もその嫌いが無い。主役三船敏郎外一同の熱演、丸山、円谷両監督の苦勞がうかがえる。私にこれにもまして、自然にクエゼリンに思いがうつった。北と南の差こそあれ、洋上の小島嶼であり、補給の困難なことはよく似た形である。二十年祭に名誉会長がその祭文の中で「さぞ残念であったでしょう。口惜しかったでしょう。私たちは一隻の軍艦、一機の飛行機の援軍なく全員のやむなきに至った」と聞き、誠に残念でありましたのとべられたが、キスカは援軍があつたため五千二百人が全員救出され、クエゼリン方面三島はこれなため一万二千の同胞が全員戦死のやむなきに至った。不自由さはキスカと同じであったろうにと、胸が一ぱいになった。キスカから帰還した五千二百名の一人一人に心からのお喜びを申しあげると共に、三島の英霊に對し心からの祈りをささげた。御一見御奨めできる映画と思えました。

#### 本会役員及び 篤志会員名簿

- |        |        |
|--------|--------|
| 名誉会長   | 朝香 鳩彦  |
| 顧問     | 石橋 湛山  |
| 相談役    | 朝香 孚彦  |
| 会長     | 林 茂清   |
| 副会長    | 加藤普佐次郎 |
| 副会長    | 古賀織之助  |
| 幹事(常任) | 浮田 信家  |
| 幹事(常任) | 佐藤 宗丕  |
| 幹事     | 萩原金次郎  |
| 幹事     | 井上 賀雄  |
| 幹事     | 高橋 鎮夫  |
| 幹事     | 市川奈美子  |
| 幹事     | 木村 久子  |
| 幹事     | 小泉 文江  |
| 幹事     | 岡野 正文  |
| 幹事     | 橋口 昭利  |
| 監事     | 有馬 成甫  |
| 監事     | 板垣 徹   |
| 篤志会員   | 大野 克一  |
| 篤志会員   | 瀬沼 光久  |
| 篤志会員   | 土屋 太郎  |
| 篤志会員   | 中島 昌彦  |
| 篤志会員   | 中田 虎一  |
| 篤志会員   | 成田喜代治  |
| 篤志会員   | 長谷川栄次  |
| 篤志会員   | 長谷川 敏  |
| 篤志会員   | 林 幸市   |
| 篤志会員   | 松平 永芳  |
| 篤志会員   | 村岡 達志  |
| 篤志会員   | 安藤 小夜  |
| 篤志会員   | 本木 光江  |